

## 黒田喜夫の詩 ― 初期詩篇から処女詩集『不安と遊撃』まで

テキスト『現代詩文庫 黒田喜夫詩集』（一九六八年二月、思潮社）

二木 晴美

## ■目次

- 1 略年譜
- 2 現代詩文庫収録以外の、詩・評論・参考資料
- 3 まとめ

## ■略年譜（参考『黒田喜夫全詩』「黒田喜夫年譜 阿部岩夫編」一九八五・四、思潮社）

一九二六〔大十五年〕年 二月二十八日、山形県米沢市住之江町（直江町か？）に、父我孫子喜三郎、母黒田よの次男として生れた。六つ年上に兄喜一がいた。父母は内縁関係にあったため母方の籍に入る。父方は、山形県西村山郡紫（柴か？）橋村中郷（現寒河江市）の地主だったが、祖父の代にて没落し、父は下駄木地師や下駄屋の職を経て、米沢市に最上屋旅館を開業、喜夫はここで生まれる。母方は、山形県西村山郡寒河江町皿沼（現寒河江市）の自作兼小作農家。

一九二八〔昭三年〕 三月父没。

一九三〇〔昭五年〕年 父が残した借財により、最上屋旅館は人手に渡り、以後、同町の借家に移り、母は和裁や団子の行商などをして生計をたてた。

一九三一〔昭六年〕年 暮らしに窮し、母の生家のある地に引き上げる。母は、主に草履表を作ったり、土方などの労働で生計をたてた。喜夫は従兄弟たちと一緒に遊んだが、百姓以下の貧者の子供、他所者として扱われた。

一九三二〔昭七年〕年 寒河江南部小学校入学。成績優秀。村一番の地主の息子と親しくなり、初めて少年雑誌や啄木、独歩、藤村の本を借りて読む。この年冷害や不況が続く周囲の小作農たちの生活苦を見る。

一九三八〔昭十三年〕年 寒河江小学校高等科に入学。

一九四〇〔昭十五年〕年 高等科卒業後、上京。東京都品川区大井北浜川の笹原製作所に年季徒弟として就職。年期は徴兵検査までで、前借八十円、五年間の給二百円、月々少額の小遣いという契約であった。

一九四三〔昭十八〕年 三年間の厳しい徒弟生活ののち、サボタージュによって、徒弟契約を破棄させ、自由の身となるが、空襲と飢えに迫られ、住居は品川区内を転々とした。その頃、徴用工としてやってきた十歳年上で同人誌で小説を書いていた中島博と親しくなり、多くの文学書を読む機会を得る。外国のものに感銘を受け、スタンダール、バルザック等の仏文学から、とくに農民生活を描いた北欧の作家ビョルンソンや、イワン・ブーニンの『村』、チエホフの『百姓』などに深い感銘を覚え、次第にロシア文学へと熱中していった。また、トゥラー、ハウプトマン等のドイツ前衛派の作品も好んで読んだ。日本のものでは、特に改造社版『プロレタリア文学集』は愛読書となり、葉山嘉樹の『淫売婦』『海に生きる人々』、金子洋文の『天井裏の善公』などを好んだ。兄入隊。

一九四四〔昭十九〕年 徒弟契約の破棄後、神田の電機学校とニコライ露語学校の夜学へ通うが、昭和十九年から二十年にかけての烈しい空襲のため残念する。ロシア語は文学的動機からではなく、満州からソ連国境への脱出を考えてのことであったという。戦争のさなか、詩らしきものを書く。プロレタリア文学やロシア文学を読むことによって、少しずつ共産主義や社会主義の思想的特徴にふれるようになったが、それはまだ思想として定着するようなものではなかった。きわめて錯綜した精神状態をもちつづけ、猛烈な飢えと、性欲、境遇への怒り、軍国主義への反撥を覚えていた。

一九四五〔昭二十年〕年 年の初め頃、中島が黒田の下宿先に移ってきたが、三月、四月の東京大空襲のあと、長野へ勤め先の工場疎開のため、中島と別れて移動する。七月、故郷寒河江皿沼に帰る。徴兵検査合格のための、兵隊に行く準備であったが、八月敗戦となる。伯父の家のラジオで天皇の放送をきき、無条件降伏により戦争が終結したことを理解した。秋、寒河江町役場（現市役所）に吏員として就職。共産党機関誌を売りにきた青年と親しくなり、雪の日、『赤旗』山形分局を訪ねる。そこで青年共産同盟山形地方準備委員となることをすすめられる。

一九四六〔昭二十一年〕年 二月、寒河江の農民運動の指導者佐藤善夫から、農民組合青年部を組織するよう求められる。内気で他所者あつかいされていたため、農民のなかに入っていくのには大きな努力を必要としたという。これが政治的活動の始まりであった。日本共産党入党。以後、他村の組織づくりを進め、山形県農村青年協議会書記、青年共産同盟山形地方委員、党山形地方委員候補、寒河江町農地委員会書記などを歴任する。

一九四七〔昭二十二年〕年 土地取り上げへの反対闘争、米の強制供出への闘争を含む農民運動、青年運動を続ける。秋、国鉄争議応援デモを組織し、米軍山形軍政部によって逮捕される。（資料2 「おれの河」）

一九四八〔昭二十三年〕年 寒河江町役場を辞め、日本共産党山形県委員会の専従になるが、まもなく喀血発病。六月、病状が進み、国立療養所左沢光風園に入院する。

一九四九〔昭二十四年〕年 六月、左肺合成樹脂充填の手術を受ける。死の危機に直面し、死の恐怖にとらわれる。この頃から再び文学作品を読むようになり、今までとは別の意味で人間や社会を考える。

一九五〇〔昭二十五年〕年 療友清野正秋らと回覧誌「かがり火」創刊（一九五二年）。初めて「最上川の歌」と題するプロレタリア詩ばりの作品を書いたという（未確認）。【発表詩篇…「雲」p8、「沼地にて」p9、「河」p9、「髪」p10、「うぐいす笛を吹く人」p10、「赤い空」p11、資料3 「凍河を見た」、「砂の断章」、「出漕」】（一九五九年夏の日記―自伝に代えて）p115）

一九五二〔昭二十六年〕年 十月、清野、今田郁夫らと詩誌「詩炉」創刊。（一九六二年）

一九五二〔昭二十七年〕年 「詩炉」を通じて、神奈川療養所に入院中の瀬木慎一を知る。更に詩誌「列島」の運動（資料4）を知り、関根弘、長谷川龍生や、「荒地」などの戦後詩人の詩に大きなショックを受けた。

一九五三〔昭二十八年〕年 療養所を退院。農民指導者の佐藤善夫の土地を借り、小家を建てて、孔版印刷を開業。「詩炉」続刊する。【発表詩篇…「秋―接収地の九月のために」1号、「とりで」2号、「黍餅」 「花」4号、「詩書をあとに」 「おれの河」7号、「ひかる目だ」 「ふかくメスを①」8号、「いつものように」 「占領地の近くで」 「夜の雲」 「秋」 「路で」 「黍餅」 「とりで」 「明日は」9号、「民族移動」 「秋」 「黍餅」 「とりで」】

一九五四〔昭二十九年〕年 新日本文学会主催の全国詩人会議に出席のため上京。その折、瀬木、関根、木島始、木原啓允ら「列島」の詩人たちと出会う。その後、「列島」「新日本文学会」に入会。

一九五五〔昭三十年〕年 春、上京。豊島区西巢鴨に間借りする。ここで『列島詩集』に発表する詩「空想のギリラ」（p19～20）を書く。八月、菅原克己らのすすめで、新日本文学会詩委員会機関誌「現代詩」の編集の仕事をする。

一九五六〔昭三十一年〕年 「現代詩」の編集に携わって以来、新しい文学運動に批判的な覚からの圧迫に苦しみつつ、いわゆる民主主義詩運動の脱皮に心をくだいた。この頃、若い画家や映画作家らと接触し「映画批評」を書く。また吉本隆明を知って、彼の文学者としての戦争責任論を積極的に支持した。十月二十六日に起きた、いわゆるハンガリー事件（資料5）に衝撃を受け、詩「ハンガリアの笑い」（p20～23）を書く。一方、谷川雁や井上俊夫などの仕事を知り、自己の農民的内部を改めて問題にせざるを得なくなり、伝統とアバンギャルドの関係についての理

論を求めるようになる。この間、真壁仁らの「山形文学」、花田清輝らの「記録芸術の会」、玉井五一らの「首の会」に参加。【発表詩篇：「隠された村へI」 p40～41、「空想のゲリラ」 p19～20、「希望I」(後「希望の始まり」と改題) p37～39(以上「現代詩」)、「隠された村へII」 p42～44(新日本文学)】

一九五七[昭三十二年]「現代詩」編集長となる。大阪から上京した長谷川龍生らと親しく交わる。松永五一らと「民族詩人」の会を結成。【発表詩篇：「叫びと行為」 p36～37(近代文学)、「民族移動」(らんる)、「観念論」(現代詩)】

一九五八[昭三十三年] 春、池田三千代と結婚。大田区糎谷町に転居。「現代詩」が新日本文学会を離れ、「現代詩の会」という詩人組織の編集雑誌となったため、「現代詩」の編集をやめる。八月、鮎川信夫、岩田弘、大岡信、木島始、菅原克己、関根弘、長谷川四郎、長谷川龍生、吉本隆明らと「現代詩の会」の運営委員となる。ますます健康状態は悪化するが、この間多くの作品を書く。詩集『不安と遊撃』の中心的作品は、この時期から翌年にかけて書いたものである。【発表詩篇：「昼も夜も」 p46～52、「毒虫飼育」 p27～29(共に「現代詩」)、「二つの愛」 p44～45(民族詩人)】

一九五九[昭三十四年] 十一月、「列島」同人で医師の御庄博実の計らいで、代々木病院に入院。十二月、処女詩集『不安と遊撃』(飯塚書店、解説・岩田弘)刊行。【発表詩篇：「暗い日曜日」 p34～36(詩学)、「夜の街で舞う」「末裔の人々」 p29～31(共に「現代詩」)、「非合法の午後」 p24～25(民族詩人)、「河口眺望」 p33～34(後、「憑かれてる日のデッサン」に改題、「新日本文学」)、「狂児かえる」 p26～27(近代文学)、「一九五〇年冬」「草人形」 p39～40、「獣にかえれない」 p40(いずれも詩集『不安と遊撃』に収録)】

一九六〇[昭三十五年] 二月、「現代詩の会」第一回総会開催。四月、左肺開胸手術。苦痛甚だしく、以後度々死線をさまよう。五月、詩集『不安と遊撃』で第十回H氏賞受賞。八月、余病併発し、危篤状態に陥る。【発表詩篇：「ウ・ナロード」(新日本文学)、「原点破壊」 p31～33(現代詩)、「セレナーデ」 p60～61(詩学)、「鳥目の男」 p56～57(文学界)】

一九六一[昭三十六年] 代々木病院入院続く。七月、日本共産党第八回大会に際し、現指導部を批判する花田清輝、野間宏らの文学者グループの闘争に参加。【発表詩篇：「転移の海」 p59(日本読書新聞)、「踊り屋」「地中の武器」 p64～71(共に「現代詩」)、「食中植物譚」 p61～63(詩学)、「寄生虫二題」(「冬の旅」読売新聞、「朝の歌」詩炉通信)、「朝の光り」 p57～58(文学界)、「音楽家の友への五つの詩」 p53～56(生活と文学、ヤマハニュース)】

一九六二[昭三十七年] 一月、反安保闘争、綱領論争などをめぐる党指導部批判により、日本共産党離党表明。代々木病院内にて党中央統制委員会の査問を受け、除名通告を受ける。十二月、現代日本詩集 8 第二詩集『地中の武器』(思潮社、解説・高良留美子)刊行。【発表詩篇：「ポーランドの何処かで」(現代詩)、「除名」 p63～64(文芸)、「死者と記録へのモノログ」(現代詩手帖)、「朝の歌」(詩炉通信)】

一九六三[昭三十八年] 四月、東京都下清瀬町国立東京病院東療病棟へ転院。左肺上葉切除術を受ける。

一九六四[昭三十九年] 三月、新日本文学会退会。六月、国立東京病院を退院し、清瀬市竹丘二丁目に住む。

一九六五[昭四十年] 六月、評論集『死にいたる飢餓』(国文社)刊行。

一九六六[昭四十一年] 一月、『現代詩手帖』の詩誌評を一年間担当。九月、『黒田喜夫詩集 一九五四—一九六六』(思潮社)刊行。

一九六八[昭四十三年] 二月、『現代詩文庫 黒田喜夫詩集』(思潮社)刊行。胸部手術の後遺症と過労のため不

整脈を多発し、再入院（翌一九六九年四月）。

五月、『詩と反詩 黒田喜夫全詩集・全評論集』（勁草書房、解説・北川透）刊行。（以下略）  
\*\*尚、ゴチックで記された作品と頁は、テキスト『現代詩文庫』に収録されたものであることを示す。

## ■参考資料

### 1 「初期（未刊）詩篇について」（『黒田喜夫全詩』解説・阿部岩夫、p517）

初期（未刊）詩篇というのは、処女詩集『不安と遊撃』（一九五九年、飯塚書店刊）出版以前に書かれたもの、という意味である。（中略）

この五十数篇におよぶ初期（未刊）詩篇を大別してみると、戦時中のもの、回覧誌「かがり火」時代のもの、同人誌「詩炉」時代のものになる。

戦時中の作品は、黒田が十八歳のころ、品川の町工場で年季徒弟として働いていた時期（昭和16年）のものである。のちに、初期詩篇の補遺として「現代詩手帖」（一九八一年四月号）に発表している。「かがり火」は、黒田が二十二歳（一九四八年）のとき、肺結核で倒れ、生涯の苦患の原因となった「左肺合成樹脂充填術」という手術を受けた国立療養所左沢光風園に入院中に出した回覧詩である。この誌は、生原稿をそのままとじたもので、療友清野正秋らと、一九五〇年から一九五二年頃まで続けた。

「詩炉」は、黒田がまだ左沢光風園に入院中、「かがり火」と多少時期が重なるようなかたちで出したガリ版刷りの同人誌である。同人には、療友の清野正秋、今田郁夫らの外に安食昭典がいた。一九五一年から一九六二年まで続いたが、一九五五年春上京するまで、黒田はつねに活動のリーダーとして発行兼編集の責任者であった。

### 2 詩「おれの河」（「詩炉」7号一九五三年十二月、再掲「列島」8号一九五四年五月）

おれの河

おれが生まれた土地に河があった

おれがこき使われて育った土地にも

おれが河べりに腰をついていたことはいく度もあったのだ

しかしただ一度こういったことがあるか

た・え・き・れ・ぬ と

耐えきれぬのはこうだ

空虚な波の騒ぎをみておれのはらわたの

間を一本の河がくねるのを感じることに

目の前を山から海まで

水が岩をくずして流すように

そいつがおれをおし流す

流して

白日のしたにおれを投げる

投げ捨てて去る

\*

だがずうつと前から  
おれのはらわたの間に一本の河がくねっている  
それを知ったのは十五歳のときだ  
えたい知れないものだと思った  
けれど若しかしたら と思った

三年あと夜学の軍事教官が衆人環視のなかで  
おれの横面をはった  
そのときそいつはえたい知れずに鳴りわめいて  
腹を走りまわった

それから鳴りつづけだ  
そいつはむしろ上の方へ  
いちばん深いところから大気管支の分れ目あたりに逆流する

それにつきあげられながら

十二時間労働

空襲の日夜

飢え

童貞破棄

革命組織参加

と突破し ああしかしこれじゃ息つく間も  
ありはしないと悶えていたとき

一九四七年秋

無届示威行進首謀の理由で拘引されたY市軍政部の一室で  
いたけだかな一人の外国人がおれの額をねらって  
空のピストルをカチリといわせたので

たちまち滝のように流れおち

下腹のそうだ

ちようど膀胱のあたりで

ごぼりごぼりと笑いだした

### 3 詩「凍河を見た」

凍河を見た

凍河を見た

凍みわれた野に

にぶく光る冬の河を

飛沫もない ざわめきもない  
黙々とした行列をゆく流れを

そのよどみは  
声をあげるものをもあげないものをも  
ひとしく呑む

数々の樹や雲があつたと  
誰がいうだろう

知る限りよりの膨大な蚕蝕のうえに

その岸は決別の罌であり  
そこで泪と死屍は凍りつく

隠されている者は知らない  
何ものの股間のしたたりか  
あくない思の何の故かを

だが抗いがたくわたしは欲する  
鉛色の感度のすべての重量を

抗いがたくわたしは欲する  
経かたびらを裂く関節のくるめきを

戦慄ゆえに  
極寒の季節の戦慄ゆえに

#### 4 「列島」(『現代詩大辞典』三省堂、二〇〇八・二より)

一九五二(昭27)年三月創刊。前年一〇月以来「芸術前衛」と「造形文学」の有志が集まり新しい前衛詩運動について検討を重ね、モダニズムの克服、象徴的手法の克服、民族伝統と文芸の継承、民族的叙情の育成、叙事詩の展開といった問題意識で一致。この運動に、四八年に葦会を組織して雑誌「葦」「小説葦」、総合雑誌「潮」等を創刊し編集する山本茂実が共鳴し、編集人井手則雄、発行人山本茂実、発行所葦会内列島で出発。創刊編集委員は安部公房、出海溪也、井手、木島始、木原啓允、許南麒、椎名麟三、関根弘、野間宏、福田律郎、村松武司、山本茂実。地方委員として伊城暁、伊藤正斉、生石保、長谷川龍生、浜田知章、御庄博実、湯口三郎、吉田美千雄、吉本千鶴が名を連ねる。野間による発行の辞は、当時「新日本文学」から分かれた「日本文学」の理念に近く、労働者、農民、勤労市民から「新しくほんとうの詩人」が生まれることを期待している。(佐藤健一)

#### 5 「ハンガリー事件」(『広辞苑』第六版、岩波書店、二〇〇九より)

一九五六年、ソ連の軍事介入をもたらしたハンガリーでの一連の事件。非スターリン化を求める市民と政府側との武力衝突が起こり、ソ連が軍事介入し、親ソ政権を立てた。ハンガリー動乱。

#### ■まとめ